

## ロシアに染まったドイツ人女帝

—日本人漂流民の帰国を支援—

田端里美

今年の4月より本学にロシア語学科が開設されるにあたり、本稿ではロシアの女帝エカチェリーナ2世の生涯について書こうと思います。みなさんも、一度はこの名前を耳にしたことがあるのではないのでしょうか。エカチェリーナ2世とは、1762年から1796年まで、女帝としてロシアの発展に貢献してきた人物です。

エカチェリーナ2世(Екатерина II Алексеевна, 1729-1796)は、1729年4月21日にポメラニア(現ポーランド)で、アンハルト=ツェルプスト公の娘として誕生しました。エカチェリーナという名はロシア正教への改宗に伴い、改名したもので、もともとはゾフィー・アウグスタ・フレデリケと名付けられていました。

彼女の容姿は特に優れているわけではなく、彼女自身もそのことについては自覚していたため、知性で容姿の劣った部分を補う努力をしました。数人の家庭教師の指導の下、熱心に勉強に取り組み、宗教や歴史、フランス語やドイツ語、音楽などの教科に力を注いでいました。

彼女が15歳の時、女帝エリザヴェータからの招きでロシアを訪れる機会があり、そこで後に夫となる定後継者のピョートル3世と出会うのです。2度の面会から、エカチェリーナ2世は彼に良い印象を持っていました。しかし彼自身にはほとんど関心はなく、将来のロシア皇后としての地位に惹かれて結婚したのだと後の話では述べています。

彼女は自分がロシア皇后の称号を得るためには、ロシア人になりきる必要があると考え、ロシア語を学び始めました。1744年にはルター派からロシア正教に改宗し、名前もエカチェリーナに変えたことで、晴れてロシア皇后の称号を得るための条件を満たすこととなりました。そして、その翌年ピョートルと結婚するに至ったのです。

1761年末にエリザヴェータが逝去し、1762年には大公がピョートル3世として帝位を継ぎ、エカチェリーナ2世は皇后となりました。

しかし、ピョートル3世が帝位に就いてからまもなく、クーデターが起こります。そこで彼は捕らえられ、混乱のさなかに殺害されてしまうのです。

夫が亡くなった後、エカチェリーナ2世はロシアを

統制するための絶対的な権利を獲得しました。元来の快活さと、ロシア人になりきるためのロシア語やロシア正教の勉強に対する努力などを国民が認めたことで、受け入れられたのです。

また彼女は、少女時代からモンテスキューやロックなどの啓蒙思想の大家の著作に触れていたことで、自身が女帝となると、自らも啓蒙専制君主的な政治を行うようになりました。例えば、伝統的な旧来の思想を批判するように、時代遅れであった1649年制定のロシア法制の改革をしています。このような施策も成功し、さらに権力を強化していきます。

また、彼女が女帝として在任していた間に日本人の漂流民である大黒屋光太夫という人物がサンクト・ペテルブルグを訪れています。

彼は江戸へ向かうための船に乗り、1782年12月9日に白子港(鈴鹿市白子町)を出港しました。船は駿河湾沖合で冬季の低気圧と北西からの強風により、航路を外れ、ロシアへと流されてしまいます。1783年にアリューシャン列島のアムチトカ島に漂着し、雪のシベリアを横断して1791年にサンクト・ペテルブルグでエカチェリーナ2世に謁見します。そして、その翌年にはラクスマン遣日使節に伴われ日本へ送還されています。

この漂流民たちは、エカチェリーナ2世の帰国を許す勅令により、無事に日本へ帰ることが出来ました。漂流民の多くは国に帰ることが許されず、生き延びることさえ難しい状況に陥る運命にあります。その中で彼らの帰国は、エカチェリーナ2世の権力により成し得たことでした。

様々な資料の中でエカチェリーナ2世といえば、ロシア全盛期の女帝であったと述べられていることから、彼女の決断がロシアへ多大な影響を及ぼしていたことが感じられます。ロシアの血は一滴も入っていないにも関わらず、彼女は、身も心もロシア人として生きた女帝であったことが窺えます。

### ■参考文献

- アンリ・トロワイヤ著;工藤庸子訳『女帝エカテリーナ』中央公論社,1980年。
- デュラント著;田中至,山内満訳『18世紀の文明史』日本ブック・クラブ,1970年。
- 和田春樹編『ロシア史』山川出版社,2008年。
- 山下恒夫著『大黒屋光太夫:帝政ロシア漂流の物語』岩波書店,2004年。
- 平凡社編『日本人名大事典』平凡社,1979年。

たばた さとみ(司書・非常勤職員)